

1920年代のアメリカ——それは青年時代である

上野直蔵

われわれが現代アメリカの国民的発展のあとをたどりうとする時、(1)第一次世界大戦以前のアメリカと、(2)第一次世界大戦と第二次世界大戦間のおよそ二十年間のアメリカと、(3)第二次世界大戦以後のアメリカと、この三つの時期においてアメリカがなしとげた国民的自覚とか、対外的態度とか、その精神面においてとか、さらにその物的生活において、明確に異った傾向が見うけられる。およそ大戦なるものは、個人の身体に施された外科手術のように、その国に極めて著しい物的、精神的影响を与えるものであるが、その例にもれず、1900年から、今日までの六十余年間に二つの世界大戦に参加し、それを通して punctuate されたアメリカ国民の態度は非常に興味ある変遷をたどっている。

1900年から第一次世界大戦までのアメリカは、いわば、やんちゃな坊であった。国内産業は発展し、大きなトラストは政府の反トラストの努力にもかかわらず（事実のところは政府は反トラストに大いに努力しなかったが）、次第にその数を増し、国はどんどん富んで行った。

フランスの A. Comte に始まった実証的合理主義がアメリカに渡ると、やがて Theodore Roosevelt のような陽気な大統領(1901—9)の下で花開き、「明日は今日よりも一層よいであろう」という風潮が国民的なものとなった。アメリカは自己のデモクラシーに自信を抱き、世界の精神的リーダーになり得るという気分が現われるようになってきた。そして社会改革の理想にもえ上った時代でもあった。日露戦争の終結にさきに記した大統領 Roosevelt が全くゆかりの高い仲裁役を買って出たのもその現われである。

その後アメリカが第一次世界大戦に参加（1917）したのはデモクラシーの発揚という道徳的立場からではなくて、むしろ抜きさしならぬほ

どにヨーロッパ連合軍に援助を与えていたので、参加しなければともだおれにならざるを得ないからであり、また、英汽船ルシタニア号のドイツ潜水艦による撃沈のため多くのアメリカ人の生命がうばわれたことによって、国民的に参戦気分が上昇し、アメリカは引きずられて大戦に参加したのであった。

近代戦においては敗戦国の苦悩と勝戦国の苦悩と、何れが大きいであろうか。第一次世界大戦後のアメリカはもはや樂天的な坊っちゃんではなく、挫折感につきまとわれた青年であった。戦争は勝利側にはあまりにも大きすぎる後始末の責任を負わせ、敗戦側にはあまりにもみじめすぎる廃墟をのこさせた。大戦以前に美德として信じられていたものが美德として通用しなくなつた。青年たちは一方には過去に絶望すると同時に、地方には自分たちの手で新らしいものを造り出そうとする意欲的な試みをするようになった。1920年代はこのような青年たちの錯誤多き試作の時代であった。文学史上からみれば、1930年を中心とする文学の開花の前夜に当る時代である。

第一次世界大戦によるドイツの敗北はナチに好個の発生を与え、これはやがては第二次世界大戦に突入すべき事態をかもし出した。アメリカは皮肉にも又もや大戦に勝利をおさめ、又もや勝者の過大の責任を負わねばならないこととなつた。しかし第二次世界大戦を終えた1945年以後のアメリカはもはや1920年代のアメリカのような青年ではない。戦争の残した痛手は前回の大戦よりも更に大きく、責任は更に過重であり、それによって、挫折感は内部に沈潜し、その行動は前回の大戦よりも慎重である。いわば、第二次世界大戦後のアメリカは大人になったアメリカである。そこには1920年代の荒々しい気負った空気は感得できない。